秋田県文化財調査報告書第124集

広沢山遺跡発掘調査報告書

— 国道398号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査 —

1985.3

秋田県教育委員会

序

秋田県南東部に位置する横手盆地には、数多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されており、これまで行われた発掘調査により、この地域の原始、古代の歴史の解明の手がかりとなっております。

本報告書は、国道398号改良工事計画の拡張予定地域内の広沢山遺跡発掘調査を実施し、その結果をまとめたものです。

遺跡の主要部は過去に調査されておりましたが、古代の土器についていくつかの知見を得ることができました。

本報告書が、今後の埋蔵文化財保護および考古学研究のうえで、いささかなりとも役立てば幸いに存じます。

ここに、調査および本報告書の作成にあたり、御指導、御協力をいただいた関係各位に心から感謝申しあげます。

昭和60年3月

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1　本書は、国道398号改良工事に伴い、湯沢市山谷字広沢山1番地の1に所在する遺跡の一部が消滅することから、記録保存を目的に昭和59年9月10日から10月5日まで発掘調査を実施した広沢山遺跡の記録である。

2　本遺跡は、「湯沢市山谷」、「取上石山土師窯跡」として周知されているが、主要部が広沢山の地割であることから「広沢山遺跡」と改称した。

3　本遺跡は、山下孫継氏と湯沢市教育委員会が、過去2回にわたり発掘調査を実施しているが、その成果が公表されていないことや、同調査で本遺跡の主体部を調査しているので山下孫継氏の調査報告（草稿）を引用しながら報告する。

4　本遺跡の調査・整理に際し、次の諸氏から御教示を得た。記して謝意を表する。(順不同)
奈良修介（前秋田県立博物館長）　鈴木俊男・山田貞吉（秋田県文化財保護指導員）　磯村朝次郎（秋田県立博物館主任学芸主事）　庄内昭男（秋田県立博物館主事）　沢谷敬（横手市教育委員会社会教育課主事）　和泉昭一（横手市教育委員会社会教育課嘱託）　新谷武（青森県埋蔵文化財調査センター調査第一課長）　白鳥文雄（青森県埋蔵文化財調査センター調査第一課主事）　秋田県立博物館　秋田県立湯沢北高等学校社会科クラブ

5　本書の草稿は、第2章を橋本、その他を桜田が分担執筆し、永瀬が補筆した。また、遺物の実測・写真・トレースを桜田、採拓を整理作業員が分担した。

6　本書の編集は、橋本の協力を得て桜田が行った。

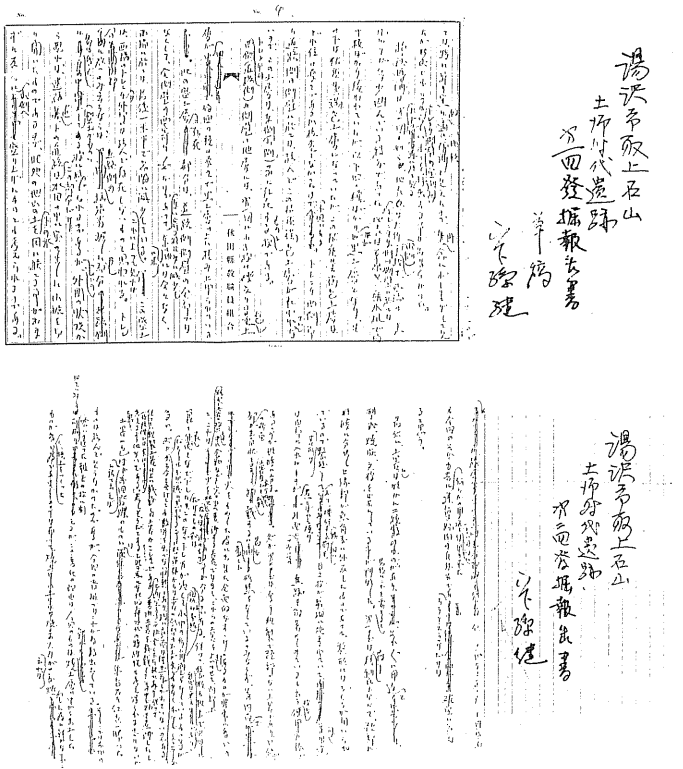
目　　次

序
例　言
目　次
第1章　はじめに……1
　第1節　発掘調査に至るまで……1
　第2節　調査の組織と構成……3
第2章　遺跡の立地と環境……4
　第1節　地形と地質……4
　第2節　歴史的環境……4
第3章　調査の方法と経過……6
第4章　検出された遺構と遺物……11
　第1節　遺跡の土層……11
　第2節　検出遺構と遺物……13
第5章　まとめ……21

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

湯沢市から稲川町・皆瀬村を通り、宮城県石巻市に抜ける国道398号の改良工事に伴い、湯沢市山谷地内の工事計画区域に、昭和30年と31年の２カ年に湯沢市教育委員会が発掘調査を実施し、『湯沢市取上石山土師時代遺跡第１回発掘調査報告書』『湯沢市取上石山土師時代遺跡第２回発掘調査報告書』として県教育委員会に発掘調査担当者である山下孫継氏から報告がなされた（第１図）[(註1)]埋蔵文化財包蔵地が所在することから、昭和58年10月に県教育委員会文化課冨樫泰時学芸主事、次いで昭和59年７月に県埋蔵文化財センター桜田隆文化財主事が現地を踏査した。この現地踏査の結果をふまえ、県土木部長から県教育委員会へ埋蔵文化財調査についての依頼〔昭和59年８月16日付け、県土木部長から県教育長あて道―178　、　国道398号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査について（依頼）〕があり、昭和59年９月10日から10月５日まで発掘調査を実施することとになった。

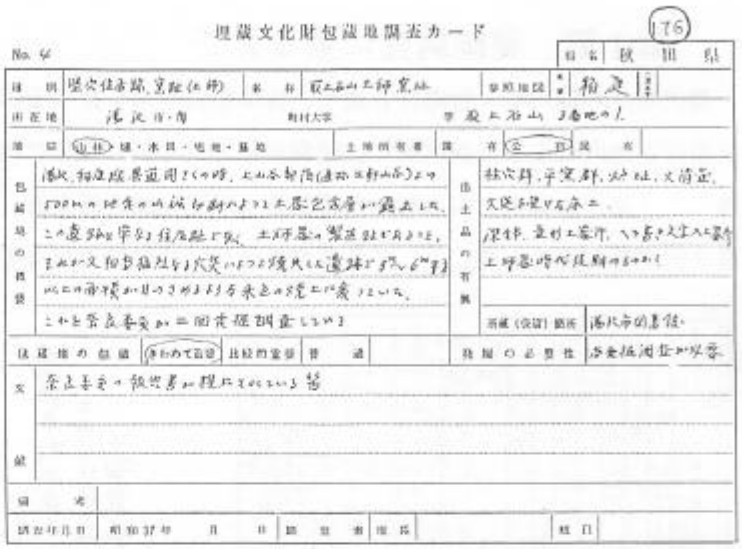


第１図　昭和30年・31年調査時の発掘報告書（草稿）

昭和30年、31年の調査のきっかけは、山下孫継氏の『第１回調査報告書』の「序言」に、「本遺跡は、湯沢市から山谷峠を越えて、雄勝郡川連町に至る県道脇にある為、川連稲庭地区から湯沢市に通学する高校生や、遺跡附近の中学生が数年前からこれを発見しており学校側にも提出していた様であるが、調査の必要が認められず今日に至った訳であるが、今回秋田県立湯沢北高校から当教委にこれが提出され、秋田県文化財専門委員奈良修介氏の御指導を迎ぎ、本格的調査を実施する運びになった」と述べられている。

昭和53年に刊行された『秋田県史考古編』の「第１章奈良平安時代」の項では、「第５節窯

址　土師器を焼成した「ひら窯」と須恵器をやいた「あなかま」とがあり、その址が両方共発見されている。ひら窯は、秋田市下新城槻ノ木、瓜生崎、湯沢市山谷で調査され、それによれば底面は平で円形、それにドーム状の屋根が粘土でつくられたものと推定される。（以下略）」と記述され、第6表窯跡地名表の「湯沢市湯沢山谷」・「山麓」、出土土器が「土師器」となっている。この湯沢市山谷の窯跡は、本遺跡のことである。


埋蔵文化財包蔵地調査カード

176

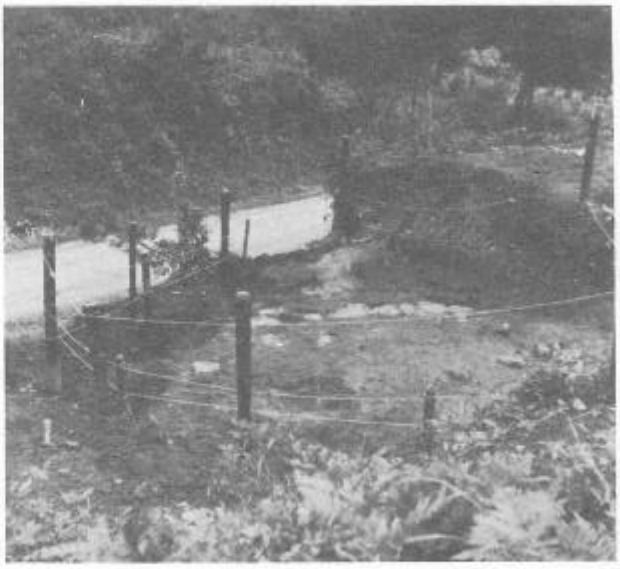
No. 4

都道府県名	秋田県				
種別	竪穴住居跡、窯跡（土師）	名称	取上石山土師窯址	参照地図	稲庭
所在地	湯沢市・南	明治大学	取上石山 3番地の1		
地目	山林 畑・水田・宅地・墓地	土地所有者	国有 公	民	
包蔵地の概要	湯沢、稲庭景観調査の時、上山谷部落（通称三軒山谷）より500mの地点の山城伝説のある土器包含層が露出した。この遺跡は学的住居跡で、土師器の製法は明らかに、また古文献等様相を異にする遺跡である。以上の所説から見ると考古学的方法を考慮に入れている。これを緊急発掘の一部資料調査している			出土品の有無	杜穴群、平窯群、炉址、文献資料、文献記録は存在。須恵器、素材工具類、いろいろ文化人類学上、土師器時代遺物多かり
				所蔵（保管）機関	湯沢市教育委員会
遺構の包蔵	多分あり 確認調査	比較的密集	普通	発掘の必要性	学術調査が必要
文献	発掘調査の報告書が理解されている。				
備考					
調査年月日	昭和37年　月　日	調査者	所長	担当	

第2図　湯沢市教育委員会保管の『調査カード』

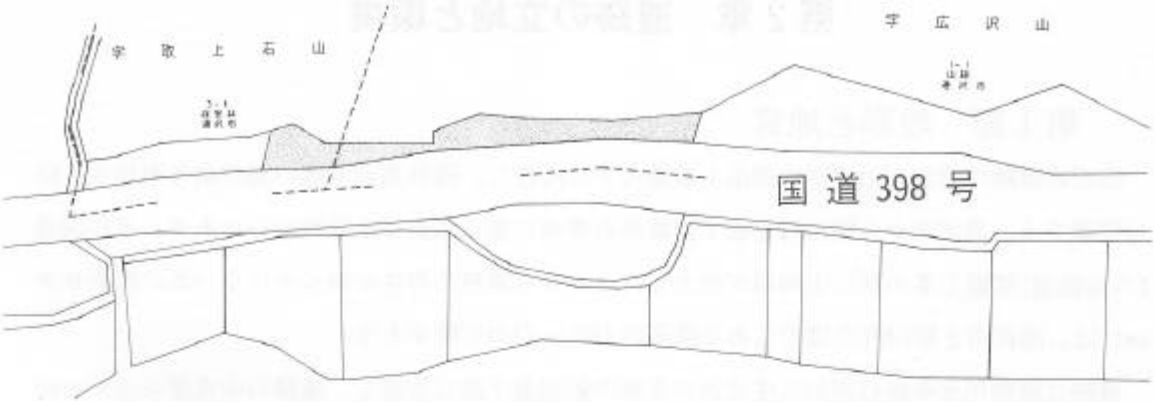
また、山下孫継編著、湯沢市教育委員会刊行の『湯沢市雄勝郡能埋蔵文化財』（山下孫継・1961）には「湯沢市山谷字取上石山遺跡（土師時代遺跡）」として遺跡全景写真・遺構写真と共に紹介されている。昭和51年刊行の『秋田県遺跡地名表』には収載されていないが、湯沢市教育委員会に保管されている昭和37年の『埋蔵文化財包蔵地調査カード』（第2図）では「取上石山土師窯址」と名称され、昭和47年度には、県教育委員会が昭和30年、31年の調査地区・中央に『取上石山土師窯跡』の遺跡標柱を建てている。

当該遺跡の所在地は、『調査カード』によれば「湯沢市取上石山3番地の1」となっているが、『湯沢市雄勝郡能埋蔵文化財』の掲載写真（第3図）と県土木部雄勝土木事務所用地課から提供された丈量図（第4図）及び現況写真（第5図）を検討すると、前2回の調査地区は、「取上石山3番地の1」ではなく、「広沢山1番地の1」であることが判明した。このことから当該遺跡を「広沢山遺跡」として調査した。



第3図　山下調査区域全景（山下1961より）

註1　山下孫継氏から県教育委員会に提出された『報告書』の原本は未確認であるが、その草稿と写真アルバムが、鈴木俊男氏の保管している山下孫継氏の遺品の中に現存する。草稿は、



第4図　国道398号山谷用地丈量図（抜粋整図）

原稿用紙の他、使用済B4判西洋紙の裏に鉛筆書きし、図面はトレーシングペーパーに描かれ、一部墨入れされていた。一般に公表されていないが、所謂「叩き目のある土師器」が多く出土しており、資料的価値が高いことから鈴木氏の了解を得て本報告書に一部使用させていただいた。

第5図　遺跡現況写真

引用・参考文献

秋田県　1960　『秋田県史考古編』　202頁・239頁
山下孫継　1961　『湯沢市雄勝郡能埋蔵文化財』　15頁　湯沢市教育委員会
秋田県教育委員会　1976　『秋田県遺跡地図』　37頁　稲庭図幅

第2節　調査の組織と構成

調査主体　秋田県教育委員会

調査機関　秋田県埋蔵文化財センター

調査担当者　永瀬福男　（秋田県埋蔵文化財センター社会教育主事）
桜田　隆　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
橋本高史　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）

事務担当者　加藤　進　（秋田県埋蔵文化財センター主査）

調査作業員　鈴木清志　高橋久一　高橋茂　鎌田昭一　高橋正一郎　加藤厳　六鎗三郎
麻生正志　佐藤弁治　小野寺政治郎　高橋啓一　高橋松雄　高橋市郎
鈴木利助　高橋忠夫　高橋ナツエ　佐藤マサエ

整理作業員　皆川恵子　後藤正子　高柳良子　嶋津竜子

調査協力機関　秋田県土木部雄勝土木事務所　湯沢市教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地形と地質

広沢山遺跡は湯沢市山谷字広沢山１番地の１に所在し、国鉄奥羽本線の湯沢駅の東約4.0 kmに位置する。湯沢市から稲川町を経て宮城県石巻市に至る国道398号線沿いにあり、その国道(当時県道)拡幅工事の際に土師器が出土したことから遺跡の存在が明らかになった。東約0.8 kmには、湯沢市と稲川町の境でもある標高約180 mの山谷峠がある。

遺跡は雄物川水系鉦打沢川に注ぐ沢の北側の斜面最下部に位置し、遺跡の中央部分はやや傾斜がゆるやかになっており、登り窯の構築には適度な斜度となっている。地形分類によると御嶽山山地に属し、奥羽山脈の西縁に位置している中起伏山地で、地質的には基盤は先第三紀神室山花崗岩より成り、これに須郷田層が発達を示し、粗粒砂岩が分布している。また、表層地質は輝石安山岩およびその火山砕屑岩からなる飯沢層に属する。飯沢層は羽後町飯沢一帯から湯沢市松岡南方を経て東端部の湯沢市街地南東方に至る地区に広く分布しており、層厚100～500 mで東へ行くほど薄くなる。輝石安山岩熔岩・同質凝灰角礫岩・火山角礫岩及び火山礫凝灰岩を主とし、酸性凝灰岩及び泥岩を挟んでいる。これらの安山岩類は多少とも変質されていて、新鮮なものはごく少ない。現況は松林で、土壌は褐色森林土壌の大仙山２統に属する。一般に礫の混入が多い。母材は新第三紀固結堆積岩及び火山性岩石で黒褐色～褐色を呈する。

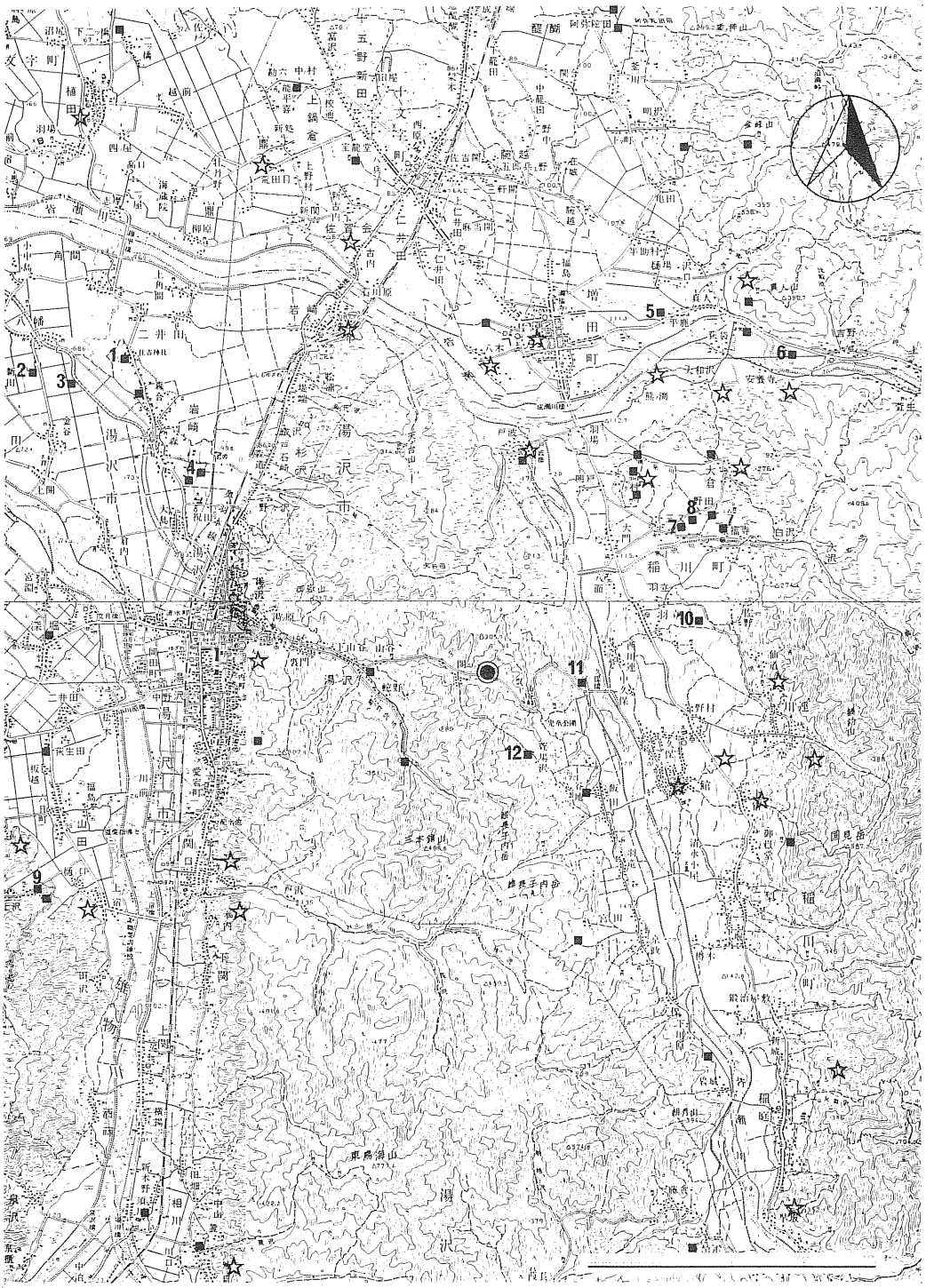
第２節　歴史的環境

広沢山遺跡周辺の周知の遺跡は第６図のとおりであり、番号を付したものが発掘調査を実施した遺跡である。

広沢山周辺からは確実に旧石器と思われる遺跡は確認されていない。可能性のあるものとして東山寺墓地上遺跡がある。近い所では図中西側にあたる羽後町新成、小松（五把出山）からの出土がしられるのみである。

縄文時代にはいると遺跡の数は増大する。早期の遺跡はまだ発見されていない。前期の遺跡としては木津根崎Ⅰ④（湯沢市）、欠上り⑪（稲川町）、梨の木塚⑥（増田町）、中期の遺跡としては木津根崎Ⅰ、鶴巻③（湯沢市）、欠上り、清水⑦（稲川町）、梨の木塚⑥、戸波（増田町）、宝龍堂（十文字町）、鍋ケ沢⑫（平鹿町）、後期の遺跡としては柴目②、上人沢（湯沢市）、内田⑧、萱場沢⑫、森、下沢田、下川原（稲川町）、梨の木塚、八木（増田町）、勘六（十文字町）、明沢（平鹿町）、晩期の遺跡としては土沢Ⅰ・Ⅱ⑨、山田中グランド（湯沢市）、森、中野、女男沼（稲川町）、平鹿⑤、梨の木塚、八木、真当（増田町）、二ツ橋（十文字町）、阿弥陀田Ⅰ・Ⅱ、明沢（平鹿町）、白沢（皆瀬村）がある。

弥生時代の遺跡としては掃部の上①、木津根崎（狐崎）Ⅱ④（湯沢市）、平鹿（増田町）がある。



第６図　遺跡位置図

平安時代の遺跡としては杉田（湯沢市）、宮の前（稲川町）、平鹿（増田町）がある。

近辺の中世城館としては岩崎城、湯沢城、松岡城、堂ケ沢館、上の宿館、関口城、瘤沢館(湯沢市)、平城、稲庭城、新城館、三梨城、川連城、八幡館、牛形城、三又城、大館(稲川町)、真人城、新城山館、片倉山館、戸波城、増田城、八木城、飯館（増田町)などがあげられる。

註

①山木孫継　1967　「掃の上遺跡発掘調査」『北方考古』第2号

②山下孫継　1967　『柴目遺跡発掘調査」『北方考古』第3号

③1967年湯沢市教育査員会発掘調査。

④山下孫継　1970「狐崎遺跡発掘調査報告」『北方考古』第5号

⑤秋田県教育委員会　1983　『平鹿遺跡発掘調査報告書』

⑥秋田県教育委員会　1979　『梨の木塚発掘調査報告書』

⑦1974年緊急調査。

⑧山下孫継　1976　「秋田県稲川町内田遺跡発掘調査報告書」『北方考古』第11号

⑨1961年奈良修介、豊島昂発掘調査。

⑩稲川町教育委員会　1976　『宮の前発掘調査報告』

　秋田県教育委員会　1977　『宮の前遺跡』

⑪滝口宏・西村正衛　1956　「秋田県雄勝郡欠上遺跡発掘報告」『古代』第18号

⑫1968年山下孫継発掘調査。

参考文献

秋田県教育委員会　1976　『秋田県遺跡地図』

秋田県教育委員会　1981　『秋田県中世城館』

湯沢市教育委員会　1961　『湯澤市雄勝郡能埋蔵文化財』

秋田県　1979　『土地分類基本調査　湯沢』

第3章　調査の方法と経過

9月10日に埋蔵文化財センターから発掘器材を現地に搬入し、遺跡に隣接する秋田県狩猟会キジ野生化訓練場前の空地に器材を降ろす。調査前の現地の踏査の結果から、天幕を設営し、器材を収納する計画であったが、候補地がいずれも不適当と判断されたので設営を断念し、訓練場管理棟を一部借用し収納した。午後から作業員に調査方法等の説明を行ったあと、7月16日の現地踏査時に土師器片を採集した地区の草刈りと

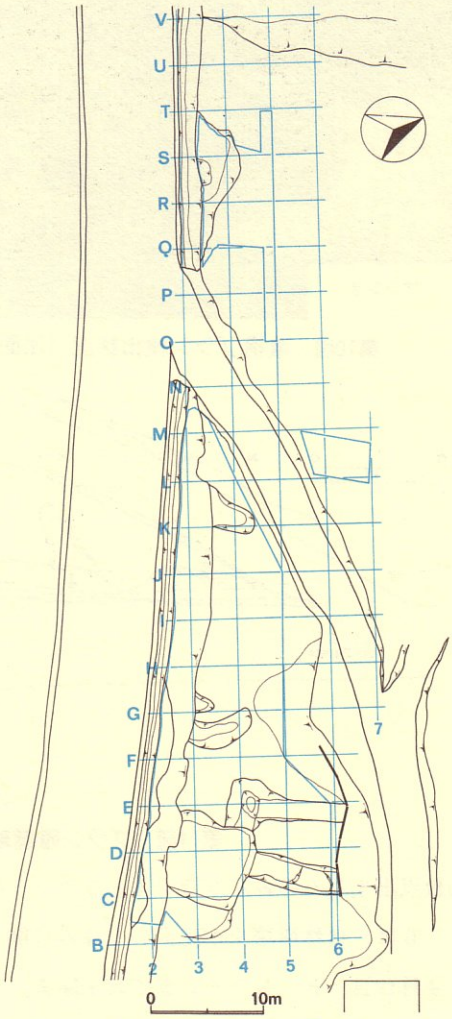
第7図　山下調査区域の現況

調査地区南側下方を国道が走っているため土留め工事を実施した。南面する斜面にのこされた「窯跡」の調査ということで、当初斜面に直交するトレンチを設定し、プランを検出できたら、その地区を拡張するという方法を考えていたが、草刈り前と草刈り後では「地形」が大きく変わったため、トレンチ設定計画を再考する。作業員から「国道398号が現道のように改良される前は鞍部になっており、焼土、「皿」などが多量に出土し、「カマ場」と呼ばれていたが、道路工事で削平されてしまった。」「昔調査され、有刺鉄線が巡らされていた。」ということを聞く。

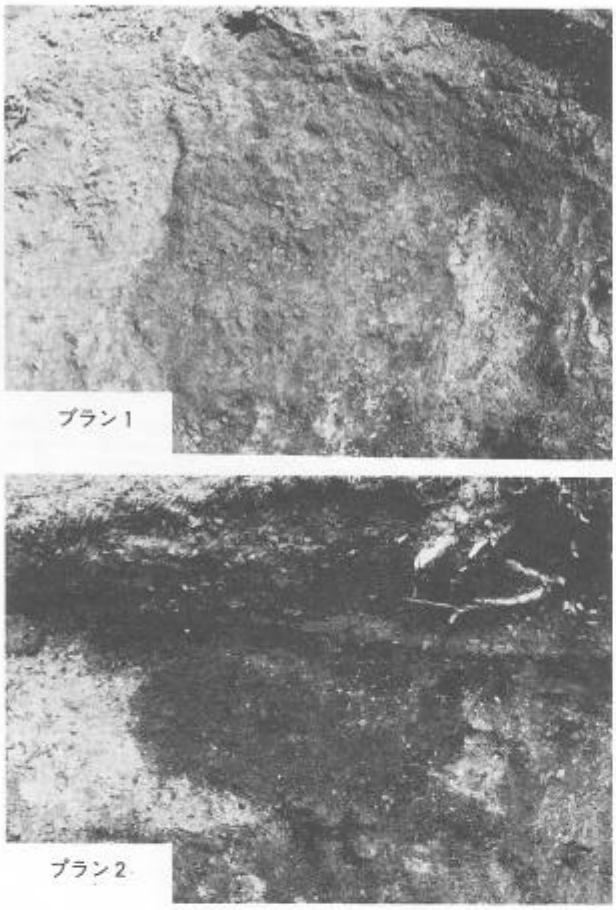
第８図　雑木・雑草除去後の山下調査区域

９月11日、草刈り後、堆積する枯葉を除去中、「窖窯」らしき形態の落ち込みが、２カ所（第７図・第８図）そのうち１カ所の下方に略方形の平坦面があり、その中央部に「取上石山土師窯跡」（表）・「昭和47年度秋田県教育委員会」（裏）の標柱が腐朽し倒伏しているのを発見した。来跡した湯沢市教育委員会伊藤徳彦主事によると、「いつ頃か明らかでないが、山下孫継氏と奈良修介氏が発掘調査したあと、有刺鉄線を巡らし、その報告が山下氏から市教委にあったらしい。標柱は県教委の指示で市教委が設置したらしい。」この方形の平坦部を囲むように腐食した有刺鉄線が埋没していた。地形にあわせ４ｍ×４ｍのグリッドを設定した（第９図）。

９月12日には、国道から訓練場へ上る道路を境にして、昨日検出した方形平坦面のある地区を中央区、西側を西区、中央区の東側を東区として、東区と西区の草刈り、土留め工事を行なった。西区、中央区にグリッドの５ラインを基線として、南側に１ｍ幅でトレンチを設定。西区をNo.１トレンチ、中央区をNo.２トレンチと呼称した。中央区



第９図　グリッド配置図

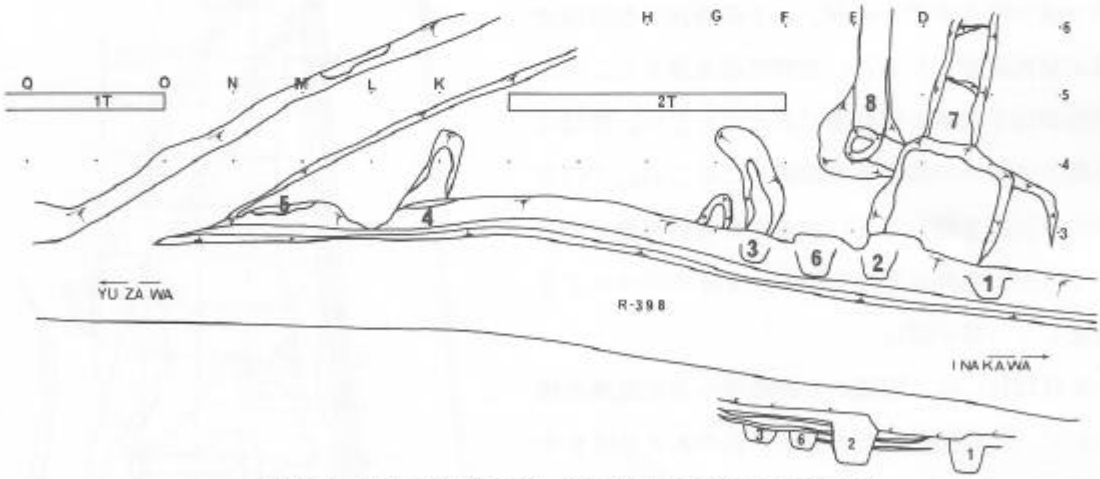


第10図　遺構プラン検出状況（法面）

の地形測量を開始する。中央区下方の国道法面でＵ字形の落ち込み２カ所確認。東側の落ち込みには焼土粒、炭化物粒が混入していた（第10図）。訓練場の管理人である近藤氏から、山谷峠のトンネルを抜けると良質の粘土が採掘されていた場所があると教示された。

９月13日には、中央区の国道法面でＵ字形プランを４カ所検出。現地表面の凹部と法面の「プラン」がよく一致していた。Ｅ－３グリッドを中心とする３－６－２のプラン位置では、黒土層と礫層が互層状態になっている。３＋６→２＋１→８→７の順に新しくなると推定された（第11図）。

９月18日、プラン１、プラン２を精査したが「土壙」の北側壁面が若干残された状態で、プラン１から甕形土師器片が



第11図　プラン確認略図（９月13日の調査日誌から）

10数点出土したのみ。プラン４とプラン５の表土を除去し、平面プラン確認作業に入った。プラン６は、自然崩壊土が法面のくぼみに貼りついたものと判断された。

９月19日、Ｆ～Ｎラインまで表土除去。プラン４とプラン５の平面を検出。溝状に斜面上方に延びているが、黒褐色土のみで焼土等は認められない。新たにプラン６を検出。

第12図　No.１トレンチプラン検出状況

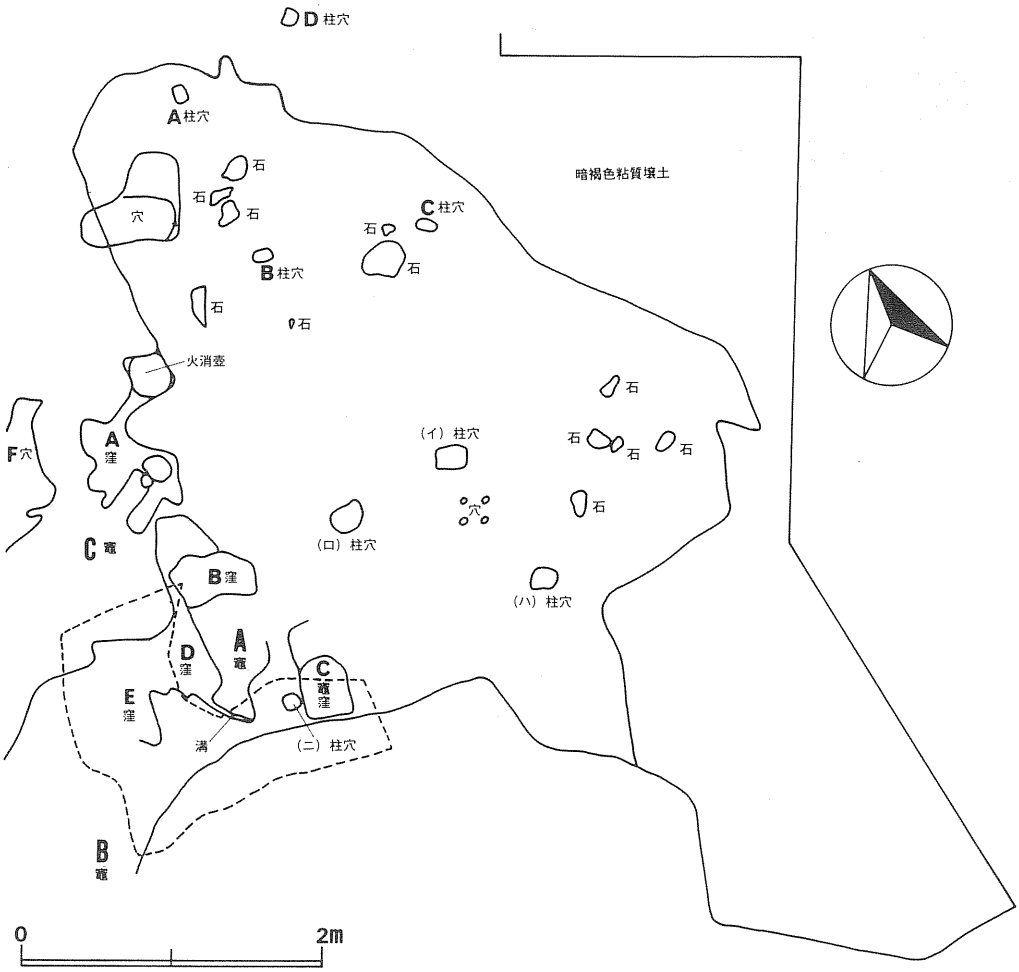
第13図　山下調査区域遺構写真（アルバム及び山下1961より）
（上）竪穴住居跡内の炉
（下）土師器製造跡（円形平窯の群と、火消し壺用の穴）

９月20日にプラン４～６の平面プラン確認した結果、３つのプランとも黒褐色土が帯状に把えられるが、地山との境界面で「窯」特有の状況も認められないし、プラン６は半円状の断面形を呈するが焼土・灰・炭化物が皆無であることから「窯」ではないと判断した。４ラインＦ～Ｊグリッドの区間に幅１ｍのトレンチを設定（No.３トレンチと呼称）。粗掘り。

９月22日、湯沢市教委伊藤徳彦主事、横手市教委沢谷敬主事、和泉昭一氏来跡。No.１トレンチのＳ～Ｑグリッド間で黒色のプランが検出されたので４ライン側に拡張し、平面プラン検出に努めたが断面観察の結果、新しい時期のものと判断された（第12図）。

９月25日、５ラインのＢ～Ｆグリッド間に幅１ｍのトレンチを設定し、プラン７、プラン８の確認を行う。甕形土師器片が多く出土した。プラン７の東側「立ち上り」が確認された。Ｌ～Ｍ・５～６間の粗掘りと、中央区の国道法面に確認された黒褐色土と礫混り層の互層堆積区域の斜面に沿って（国道と直交）トレンチ（No.４トレンチと呼称）を設定し、４ラインのNo.３トレンチとドッキングさせた。

午後に雄勝郡羽後町役場元西支所主任で県文化財保護指導員でもある鈴木俊男氏が来跡され「山下孫継氏の調査は、円形の平窯と住居跡で、報告書の草稿は遺品の中にある（第13図・第14図）。出土遺物は、奈良修介先生が保管されているはず。」と教示された。



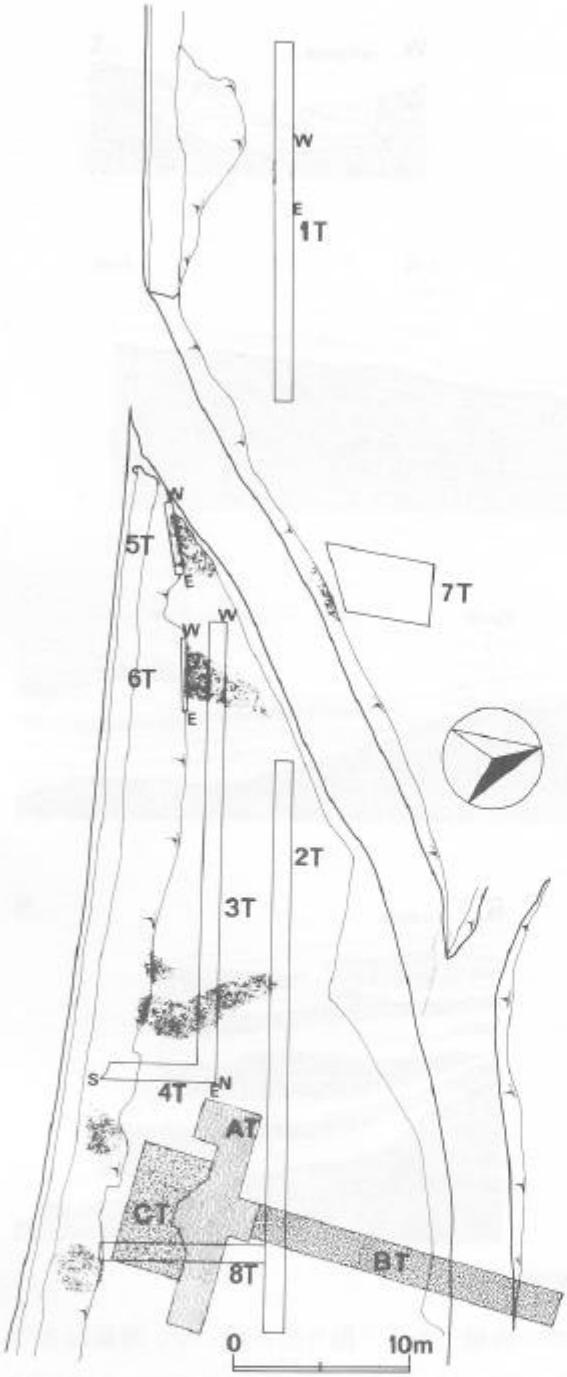
第14回　山下調査区域Ｃトレンチ遺構平面図（第２回報告書草稿より）

９月26日永瀬福男社会教育主事が調査に参加。鈴木俊男氏から山下孫継氏の報告書草稿を借用し、検討したところ、プラン７と８のあたりを調査し、埋め戻さずに「縄張り」（後に有刺鉄線）している。プラン７の下方の平坦面が「住居跡痕」。プラン７はＢトレンチ痕跡と判明（15図）。

９月27日から、各「プラン」の土層堆積状態の実測と、No.４トレンチの掘り下げを続行。西区の排土の最終処理と土留め撤去開始。

９月28日、４ラインのＧ～Ｌグリッド間の土層断面実測。中央区の排土の最終処理作業開始。

９月29日に「山下氏の調査した住居跡」も精査することにしたが、トレンチで確認したところ、山下氏の調査Ａトレンチの埋土上部に「住居跡」の焼土が厚く堆積していること、調査後に埋め戻さずに「保存」していること、昭和53年にキジ野生化訓練場が現在地に建設される前に、この平坦面にプレハブが建設されていたという鈴木俊男氏の教示があったことから、既に



第15図　トレンチ設定図
（網目は「落ち込み」・「遺構プラン」）

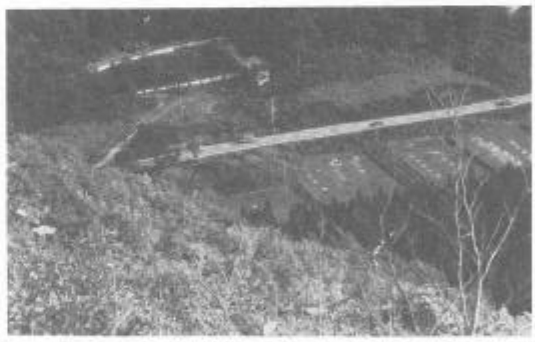
原形を損っていると判断した（第16図）。

10月４日、No.４のトレンチの土層堆積状

第16図　山下調査区域「竪穴住居跡・土師窯跡」遺存状況

態を実測、写真撮影後埋め戻し。中央区土留め撤去。

10月５日、県土木部雄勝土木事務所、湯沢市教育委員会、県立湯沢北高等学校にあいさつ。器材を搬出し、調査を完了する（第17図）。

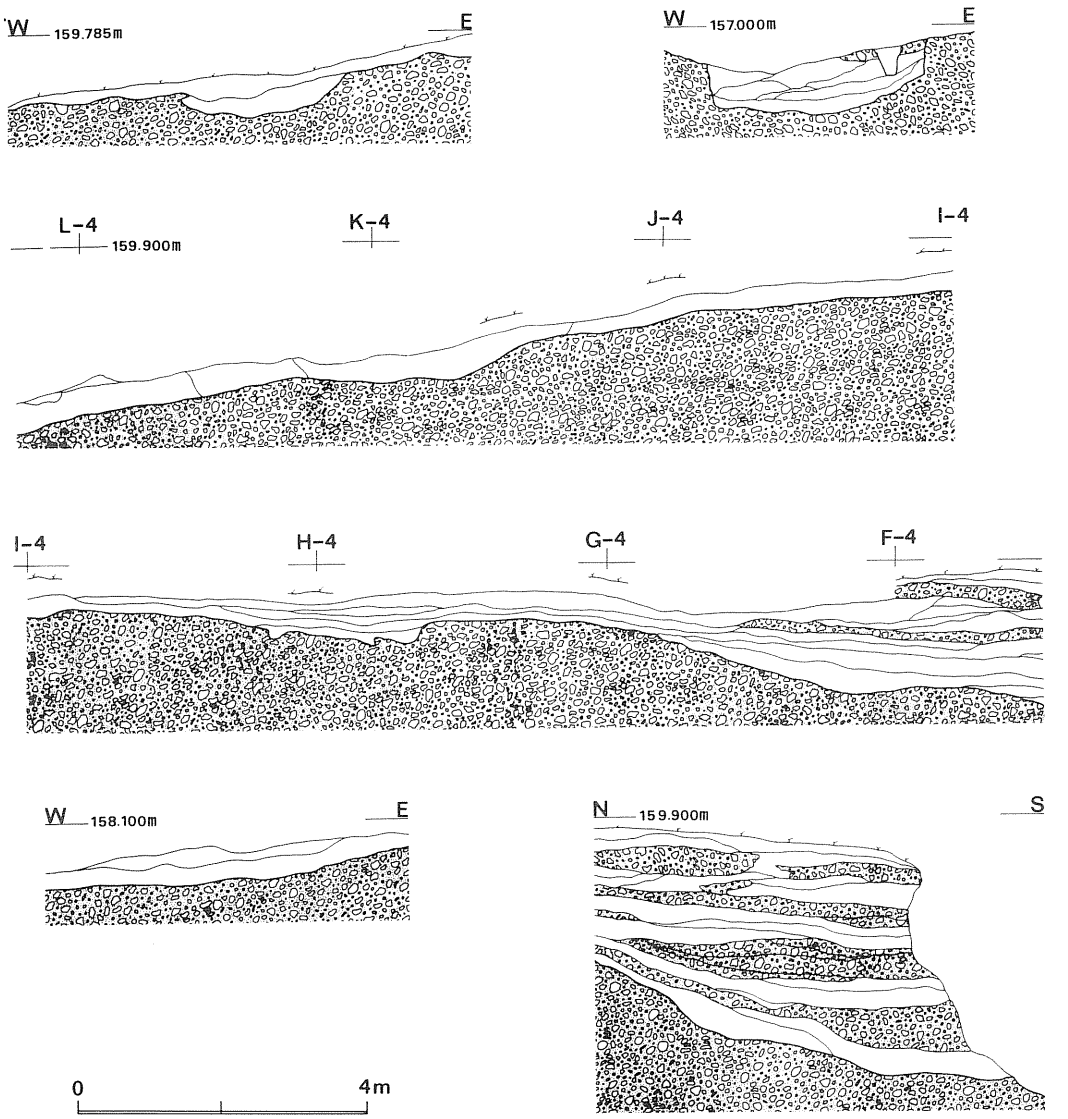


第17図　遺跡最終写真（南西から）

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の土層

本遺跡に堆積する土層は、第18図の通りである。西区のNo.１トレンチで検出された土壙状の落ち込みは、角礫を主体とする黄褐色礫層を掘り込んでおり、サラサラした黒褐色土が埋土と



第18図　土層堆積実測図

して入っていた。その直上は、表土をなす暗褐色の腐植土で、「掘り込み面」や、礫層以上の「立ち上り」は確認できなかった。礫層中には局部的に赤変した礫が確認できるが、人為的所作とは考えられない。中央区では、４ラインに設定したNo.３トレンチが標準的であるが、プラン４から上方に延びる暗褐色の落ち込みがＫ－４杭下に存在するが、人為的なものではなく、自然営力による流水痕と考えられた。この流水痕らしいくぼみはＨ－４杭下にも存在する。Ｌ－４からＧ－４までの間の地山面直上には、茶褐色土が堆積しており、溝状の落ち込みは、茶褐色土を掘り込んでいた。Ｇ－４杭から東方には、深いＵ字谷が埋没していた。地山の再堆積と思われる角礫混入黄褐色土層が２枚確認された。このトレンチは直交するNo.４トレンチと連

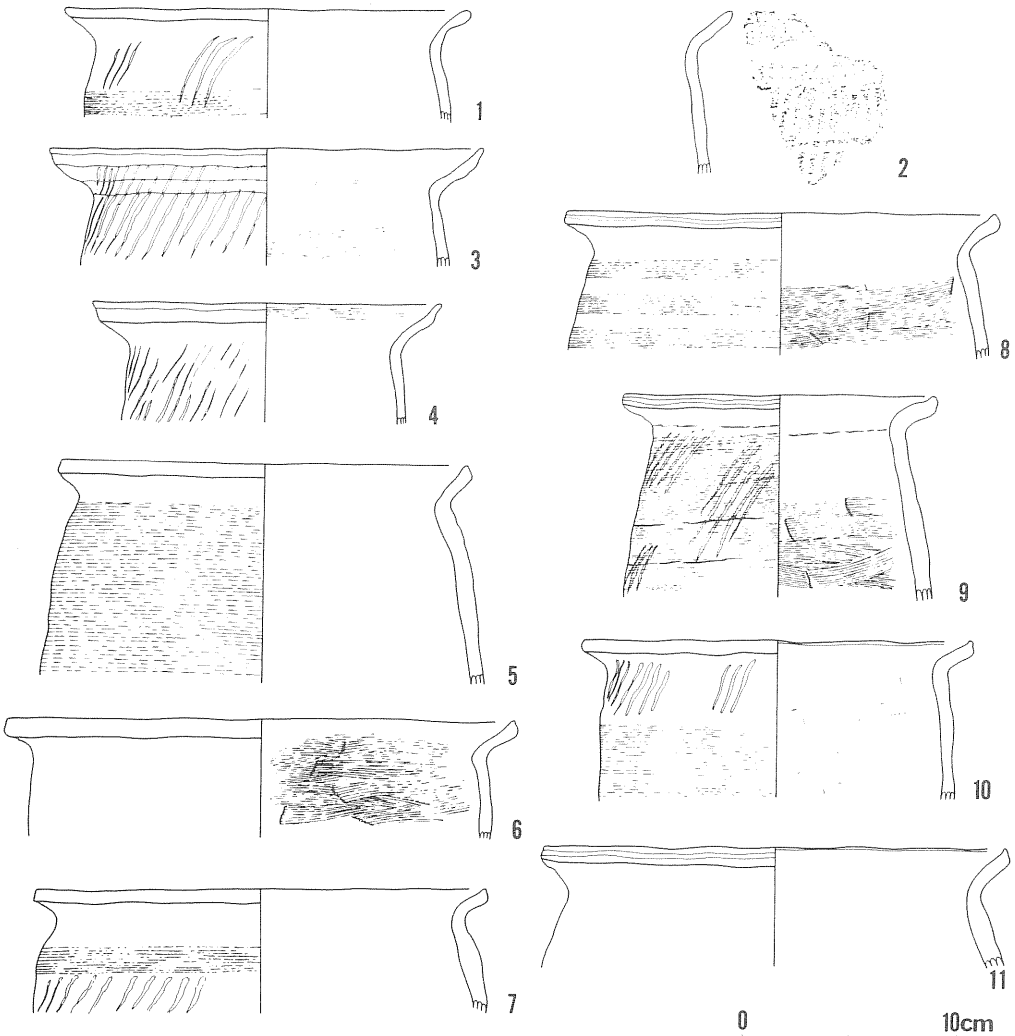
続する。その土層堆積状況は、巨視的には角礫を主体とする黄褐色礫層の地山面上に黒褐色土層、その上に角礫混入黄褐色土層が、各４枚互層状態で堆積しており、この黒褐色土層中からは土師器片が極少量出土した。自然営力か人為的埋没かはすぐに判断できないが、法面に検出されたプランを観察すると、黒褐色土層の堆積とプランの間に新旧関係が生じており、その埋没（堆積）時期が限定される（第11図参照）。この黒褐色土層と黄褐色礫層の互層状態の堆積は山下氏の調査時にはＢトレンチでも確認されており、かなり上方でも局部的に存在すると思われる。黒褐色土層中には、焼土、灰、炭化物等は全く含まれない。No.５トレンチ北側壁土層堆積状況図は、溝状に延びるプラン５が検出されたトレンチである。一部水道管埋設のため攪乱を受けている。埋土中に焼土の極薄層が確認されたが、炭質物等は含まれていない。No.６トレンチでも溝状に延びるプラン４が検出されている。地山面の上部に茶褐色土が堆積し、その上部を浅く掘り込んでプラン４があり、暗褐色土が埋土として入っている。

第２節　検出遺構と遺物

検出遺構　山下孫継氏が調査を中断した「竪穴住居跡」と「土師窯跡」は、長い年月を経過し、その間にプレハブが建設されるなどのアクシデントがあったため、その原形を止めてはいなかった。今回の調査では、当初検出した４カ所の斜面に延びる黒褐色土の溝状のプランは自然に出来た流水痕と推定され、遺構と確認できたのは土壙３カ所である。この３カ所についても、道路法面に検出されたプラン１・プラン２は、わずかに壁面の痕跡が認められたにすぎない。大部分は道路改修時に破壊消滅してしまっていた。しかしプラン１のわずかに残された埋土中から10数片の甕形土師器小破片が出土し、古代の遺構と確認された。西区で検出されたプランは、方形を呈するが、遺物が全く出土せず、掘り込み面の確認ラインも表土との層理面まで延びており、確実な時期決定はできなかったが、新しい時代のものとも考えられた。

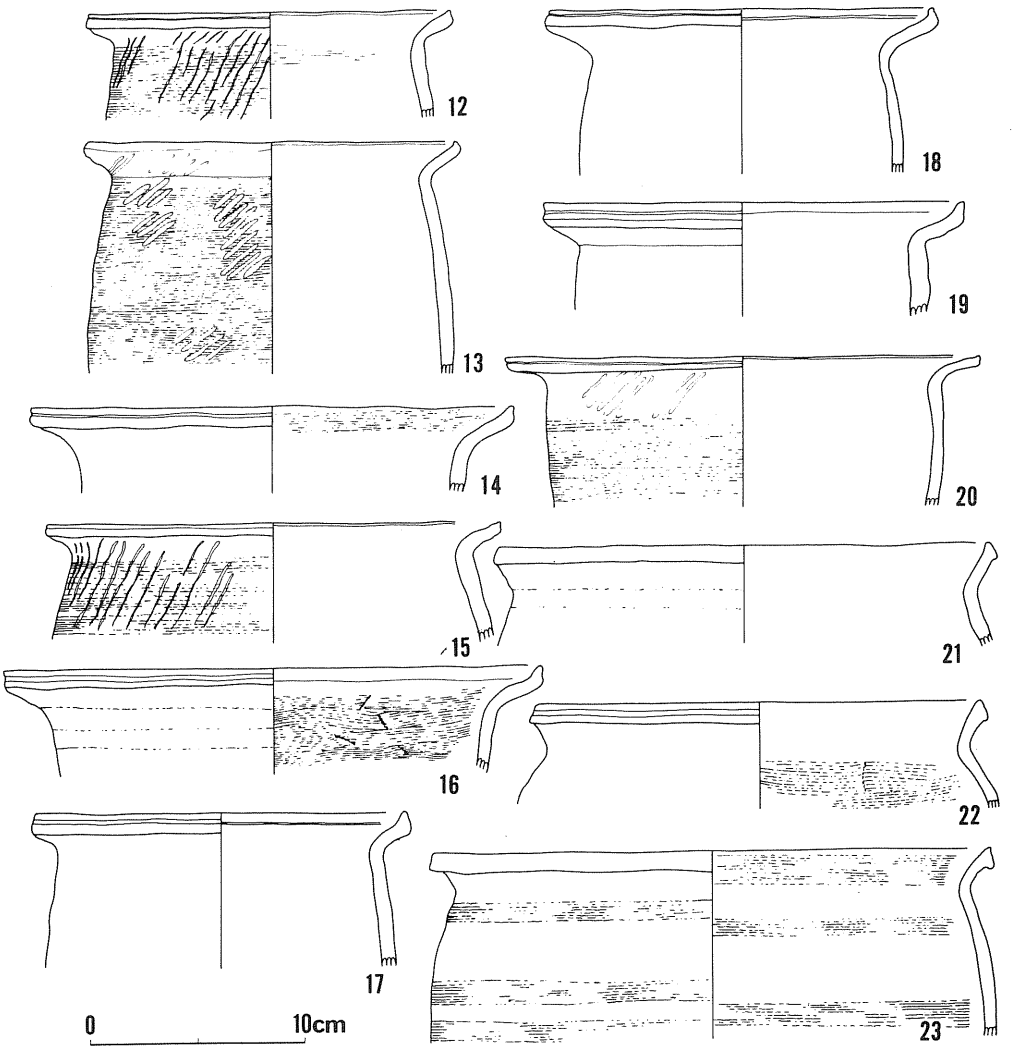
遺物　遺物としては、甕形土師器と甑形土師器が出土した。今回の調査では、量的にもコンテナ２箱と少ないが、所謂「叩き目のある甕形土師器」が出土しているため、当該土器の出土が多かった。山下孫継氏調査時の土器も加え検討した。甕形土師器は第19図１から第22図66までの66点が図示されたが、器形の全容が判明するものは皆無である。

口縁部から胴部上半にかけての破片（１～23）の口縁部形状を観察すると、①頸部で外反（１、２）。②頸部で外反後、やや立ち上る（３、４）。③頸部で外反し、短かい口唇部が直立する（５～15）。④頸部で外反し、長い口唇部が直立（16～19）。⑤頸部で大きく外反し、短かい口唇部が直立する（20）。⑥頸部でやや外反し、口唇部下端が垂下（21～23）に分類できる。この口縁部から胴部上半にかけての破片の調整技法を観察すると、須恵器の大型品によくみられる所謂「叩き目」が外面に認められる破片が多い（１～４・７・９・10・12・13・15・20）。この「叩き目」は、成形時に器壁を「叩き締め」た痕跡と思われるが、頸部で外反する口縁部と胴部



第19図　出土土器実測図（１）

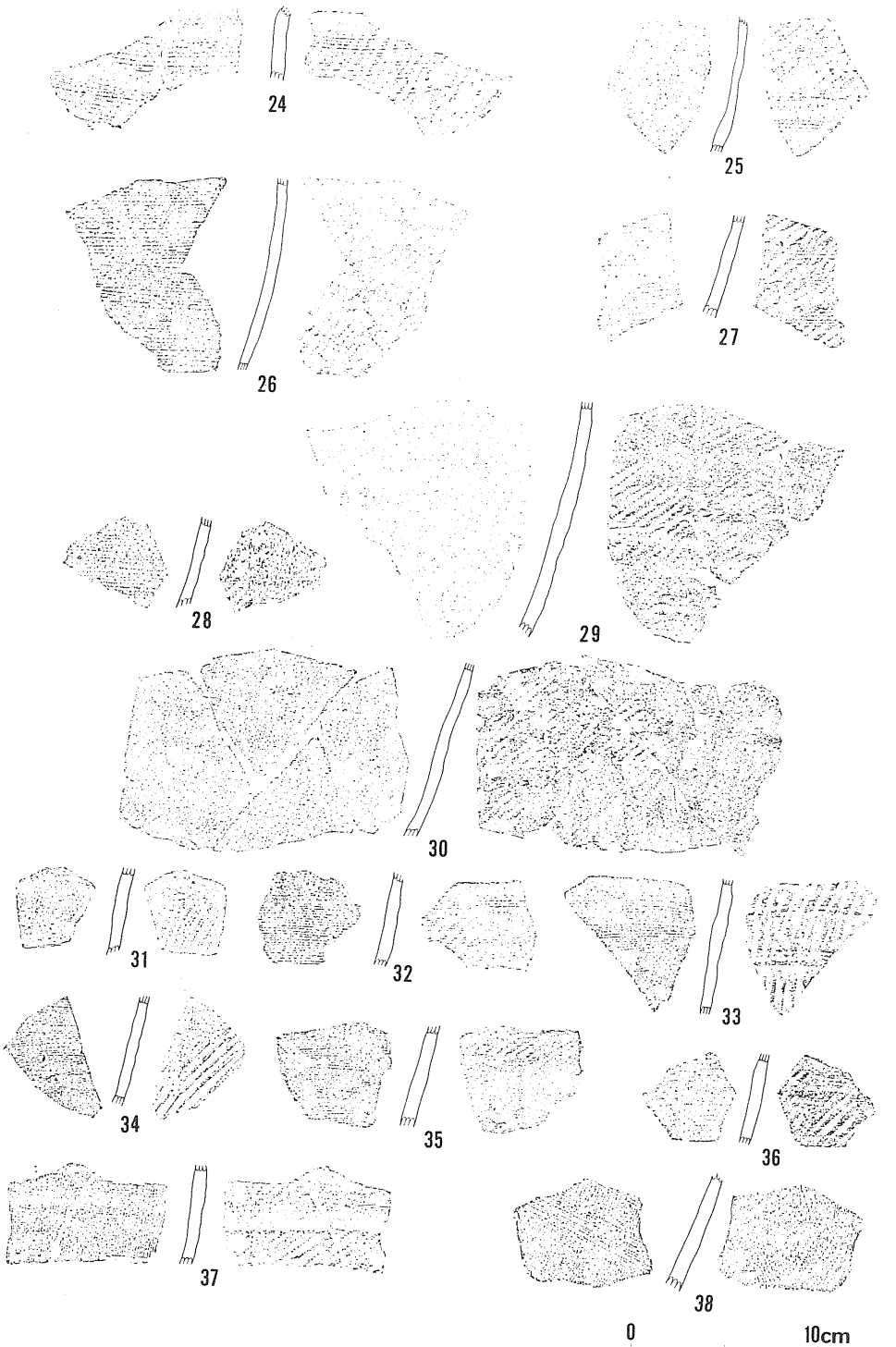
にまたがって認められるものが多く、口縁部を外反させる前に「叩き締め」たものと解釈される。「叩き締め」たあと、篦なでや刷毛目（「カキ目」と表現している場合もあるが、同じものを指す）で最終器面調整している。内面は篦なで、刷毛目、指なでなどが行なわれ、「叩き締め」時の「当て具」痕は１例（13）を除き認められない。胎土には細砂を含み、焼成良好で堅緻なものが多く、浅黄橙色を呈するものがほとんどである。胴部破片は第21図24から第22図66まであるが、調整技法を観察すると、口縁部から胴部上半にかけての破片と同様「叩き締め」た痕跡がある「叩き目」が認められるが、この上を篦なであるいは指なでしたものとしないものの２種が認められる。更に「叩き目」のみのものでも、最終器面調整を目的としたと思われるもの（40～51・54・56）も存在しこの場合には、「叩き目」の条の中に条と直交あるいは斜



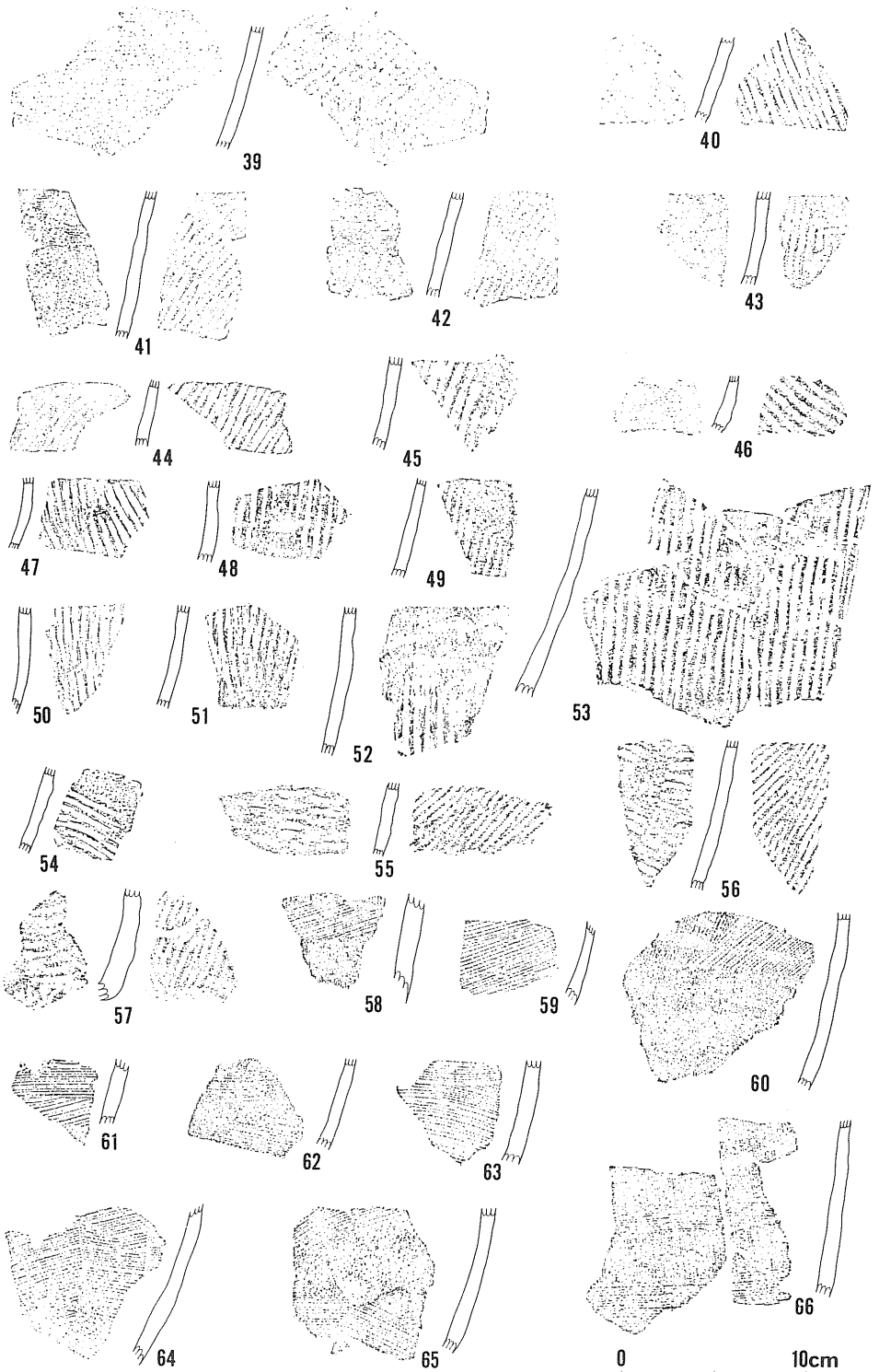
第20図　出土土器実測図（２）

交する「節」がはっきり観察できる。非常に焼成が良いことから「須恵器の焼き損ね」とも判断されそうな破片である。内面の調整は「平行当て具」痕跡の認められるもの（55・56）、青海波文（57）もあるが、刷毛目、指なでが多い。胎土に細砂・砂粒を含むものが多く、焼成良好で、浅黄橙色・にぶい橙色の色調のものが多い。甑形土師器は第23図に図示しているが、全て破片である。外面を篦削りしたものが多いが、「叩き目」、指なで篦なでしたものもある。76の「叩き目」は成形時の「叩き締め」の痕跡で、その上を指なでされているが、77・78の「叩き目」は最終器面調整となっている。内面は刷毛目が多い。胎土に砂粒を含み、浅黄橙色を呈するものが多い。「叩き目のある土師器」という語句については、「須恵器の焼き損ねの誤認」とする意見もあるが、調整技法・色調・焼成状態ばかりでなく、製作方法、胎土にも視点

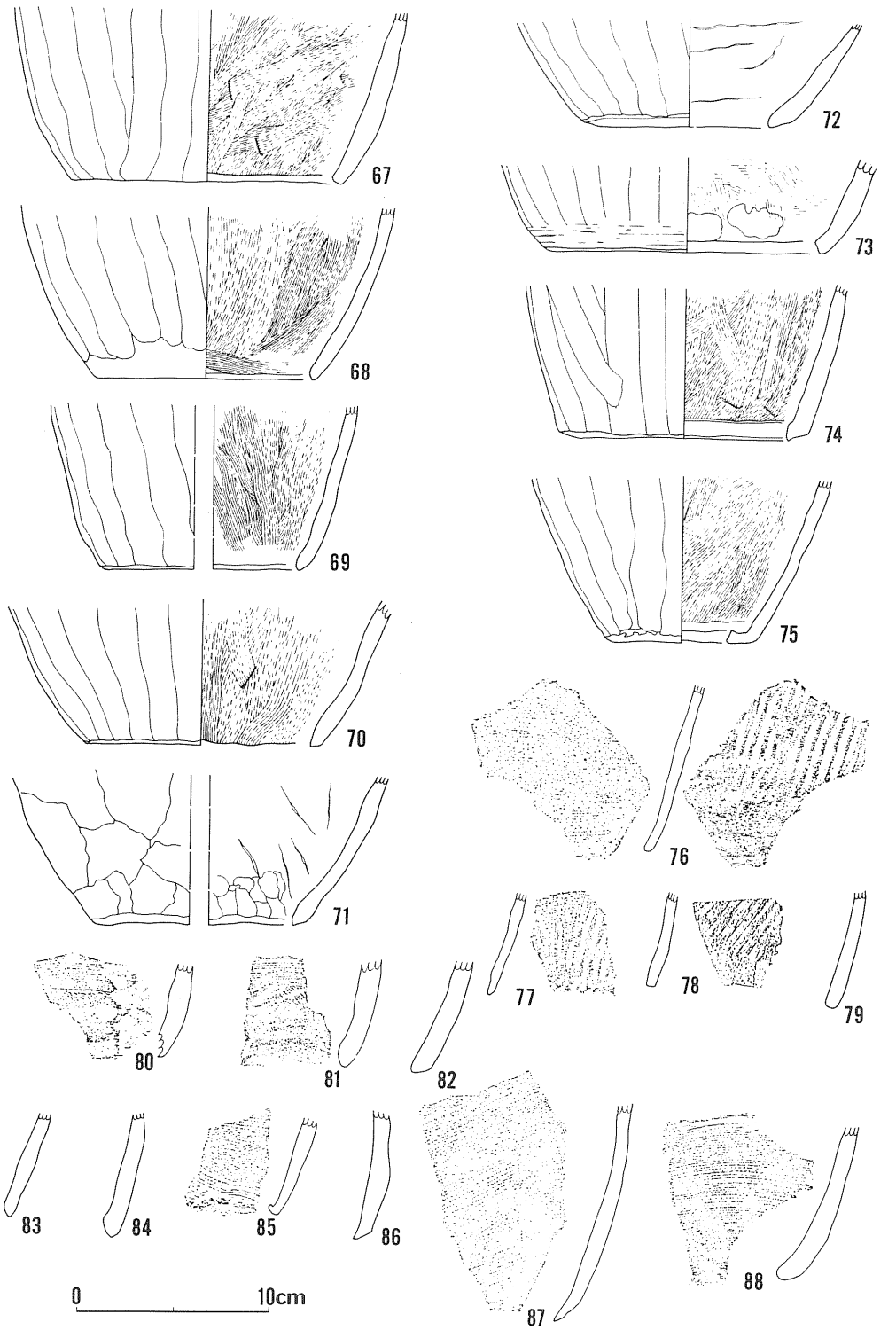
をあてる必要がある。これらについては次章で述べる。



第21図　出土土器拓影図（１）



第22図　出土土器拓影図（２）

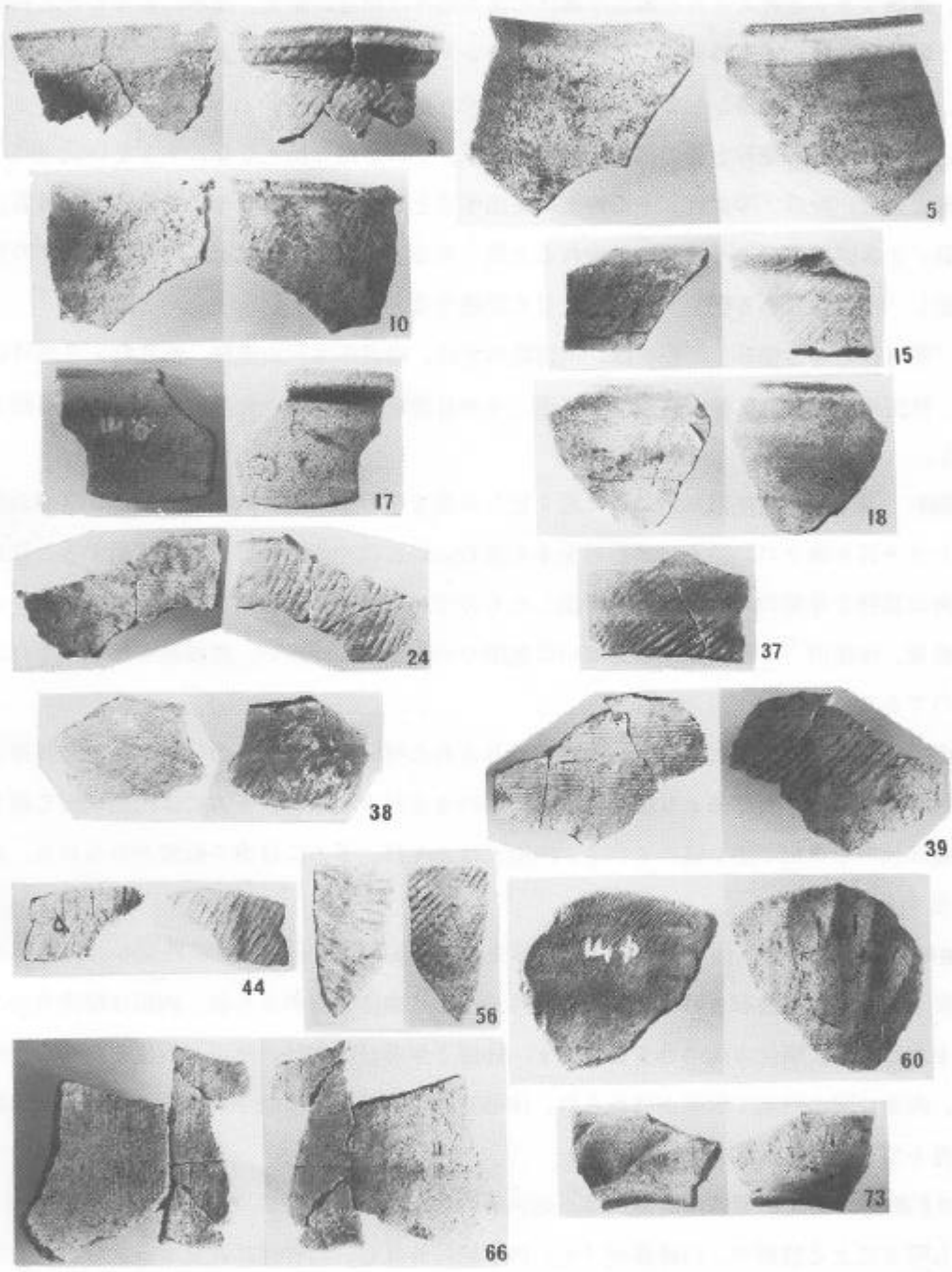


第23図　出土土器実測・拓影図

第１表　出土土器観察表

挿図番号	器種	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面の色調	内面の色調	備考
19－1	甕	「叩き目」+篦なで	(磨滅)	細砂多く含む	堅緻	浅黄橙色	灰白色	
19－2	甕	「叩き目」	篦なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	灰白色	
19－3	甕	「叩き目」	指なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
19－4	甕	「叩き目」	指なで+篦なで	砂粒多い	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
19－5	甕	「刷毛目」	(磨滅)	細砂多く含む	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
19－6	甕	指なで	「刷毛目」	細砂多く含む	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	内面ほとんど剝落
19－7	甕	「叩き目」+篦なで	指なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
19－8	甕	篦なで	「刷毛目」	細砂含む	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
19－9	甕	「叩き目」+「刷毛目」	「刷毛目」	細砂多い	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	巻上痕あり
19－10	甕	「叩き目」+「刷毛目」	篦なで	砂粒含む	堅緻	橙色	浅黄橙色	
19－11	甕	指なで	指なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	にぶい褐色	
20－12	甕	「叩き目」+篦なで	指なで+篦なで	細砂含む	堅緻	淡橙色	にぶい黄橙色	
20－13	甕	「叩き目」+「刷毛目」	「刷毛目」	細砂礫を含む	非常に堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	「叩き目」に符合するように内面に「くぼみ」あり
20－14	甕	指なで	指なで	細砂多く含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
20－15	甕	「叩き目」+篦なで	指なで	細砂含む	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
20－16	甕	指なで	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
20－17	甕	篦なで	指なで	細砂多く含む	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	外面は磨滅している。
20－18	甕	指なで	指なで	細砂若干含む	堅緻	橙色	灰白色	口唇は篦による粘土の折り返し
20－19	甕	指なで	(磨滅)	細砂多く含む	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
20－20	甕	「叩き目」+「刷毛目」	指なで	細砂礫を含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	内面に炭化物付着
20－21	甕	指なで	指なで	砂粒多い	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
20－22	甕	(磨滅)	指なで+「刷毛目」	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
20－23	甕	篦なで「	篦なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
21－24	甕	「叩き目」+篦なで	篦なで	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	浅黄橙色	
21－25	甕	「叩き目」+篦なで	篦なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
21－26	甕	「叩き目」+篦なで	篦なで	砂粒含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
21－27	甕	「叩き目」	篦なで	砂粒含む	堅緻	灰黄色	灰白色	
21－28	甕	「叩き目」+篦なで	篦なで	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	にぶい黄橙色	
21－29	甕	「叩き目」+篦なで	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	にぶい褐色	灰褐色	
21－30	甕	「叩き目」+篦なで	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
21－31	甕	「叩き目」	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	灰黄色	褐灰色	
21－32	甕	「叩き目」	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	灰褐色	
21－33	甕	「叩き目」	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	浅黄橙色	にぶい褐色	
21－34	甕	「叩き目」+篦なで	篦なで	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	にぶい橙色	
21－35	甕	「叩き目」+篦なで	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	にぶい褐色	灰褐色	
21－36	甕	「叩き目」	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
21－37	甕	「叩き目」+指なで	「刷毛目(井桁状)」	細砂含む	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
21－38	甕	「叩き目」	「刷毛目(井桁状)」	細砂含む	堅緻	にぶい橙色	にぶい黄橙色	
22－39	甕	「叩き目」+篦なで	篦なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
22－40	甕	「叩き目」	指なで（布目？）	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	灰褐色	
22－41	甕	「叩き目」	「刷毛目(井桁状)」	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
22－42	甕	「叩き目」+篦なで	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	にぶい褐色	褐灰色	
22－43	甕	「叩き目」+篦なで	「刷毛目(井桁状)」	細砂含む	堅緻	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内面炭化物付着
22－44	甕	「叩き目」	篦なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	明褐灰色	

挿図番号	器種	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面の色調	内面の色調	備考
22－45	甕	「叩き目」	指なで	細砂含む	堅緻	にぶい黄橙色	灰黄褐色	
22－46	甕	「叩き目」	篦なで	細砂含む	堅緻	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
22－47	甕	「叩き目」	指なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
22－48	甕	「叩き目」	指なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	にぶい褐色	内面炭化物付着
22－49	甕	「叩き目」	篦なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
22－50	甕	「叩き目」	篦なで	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
22－51	甕	「叩き目」＋篦なで	指なで	細砂含む	堅緻	にぶい橙色	浅黄橙色	
22－52	甕	「叩き目」＋指なで	指なで	細砂含む	堅緻	灰白色	にぶい褐色	
22－53	甕	「叩き目」	指なで	細砂含む	堅緻	灰白色	灰白色	外面巻上痕あり
22－54	甕	「叩き目」	指なで	細砂含む	堅緻	にぶい橙色	にぶい黄橙色	
22－55	甕	「叩き目」	「平行当て具痕」	細砂含む	堅緻	にぶい橙色	橙色	
22－56	甕	「叩き目」	「平行当て具痕」	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
22－57	甕	「叩き目」	「青海波文(？)」	砂礫含む	堅緻	灰白色	灰白色	
22－58	甕	篦なで	「刷毛目」＋篦なで	砂粒含む	良好	灰黄褐色	にぶい橙色	
22－59	甕	篦なで	「刷毛目」	砂粒含む	良好	にぶい橙色	にぶい褐色	
22－60	甕	篦削り	「刷毛目」＋指なで	細砂多く含む	良好	浅黄橙色	にぶい褐色	
22－61	甕	篦削り	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	にぶい黄橙色	灰褐色	
22－62	甕	篦削り	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	にぶい褐色	内面炭化物付着
22－63	甕	篦削り	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	にぶい褐色	
22－64	甕	篦削り	「刷毛目」	細砂含む	良好	にぶい橙色	灰褐色	
22－65	甕	篦削り	「刷毛目」	細砂含む	良好	橙色	橙色	
22－66	甕	「叩き目」+篦なで	「刷毛目(井桁状)」	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	浅黄橙色	
23－67	甑	篦削り	「刷毛目」	細砂含む	良好	浅黄橙色	にぶい黄橙色	
23－68	甑	篦削り	「刷毛目」	砂粒多く含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	底内縁篦削り
23－69	甑	篦なで	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	にぶい橙色	灰褐色	底径計測不能
23－70	甑	篦削り	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	にぶい褐色	褐灰色	底縁篦なで
23－71	甑	篦削り	指腹圧痕＋指なで	細砂含む	堅緻	にぶい褐色	にぶい褐色	底径計測不能底縁篦削り
23－72	甑	篦削り	指なで	砂粒多く含む	堅緻	灰白色	にぶい黄橙色	内面巻上痕
23－73	甑	篦削り	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
23－74	甑	篦削り	「刷毛目」	砂粒多く含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
23－75	甑	篦削り	「刷毛目」	細砂多く含む	良好	灰白色	灰白色	
23－76	甑	「叩き目」＋指なで	「刷毛目(井桁状)」	細砂多く含む	堅緻	灰白色	灰白色	
23－77	甑	「叩き目」	指なで	砂粒含む	堅緻	にぶい黄橙色	にぶい褐色	
23－78	甑	「叩き目」	篦なで	砂粒含む	堅緻	にぶい橙色	灰白色	
23－79	甑	「叩き目」	「刷毛目」	砂粒含む	良好	浅黄橙色	にぶい褐色	
23－80	甑	指なで	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
23－81	甑	篦なで	「刷毛目」	砂粒含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	
23－82	甑	篦削り	「刷毛目」+篦なで	砂粒含む	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	底縁篦削り
23－83	甑	篦削り	指なで	砂粒多く含む	良好	にぶい黄橙色	にぶい褐色	
23－84	甑	篦削り	指なで	砂粒多く含む	堅緻	浅黄橙色	浅黄橙色	器面磨滅
23－85	甑	篦なで	「刷毛目」	細砂含む	堅緻	にぶい褐色	灰褐色	底外面篦削り
23－86	甑	篦削り	「刷毛目」	砂粒多く含む	堅緻	にぶい橙色	にぶい橙色	底外縁篦削り
23－87	甑	篦なで	「刷毛目」	砂礫多く含む	堅緻	浅黄橙色	にぶい橙色	
23－88	甑	篦削り	「刷毛目」	細砂多く含む	堅緻	橙色	にぶい橙色	



第24図　出土土器写真

第５章　まとめ

山下孫継氏を発掘担当者とした湯沢市教育委員会の２度にわたる発掘調査から28年が経過し「精査を中断しており更に調査が必要」とされていた「竪穴住居跡」と「土師窯跡」は、調査後に一応の保存処置がとられたものの、その後に雑木・雑草が繁茂し、プレハブまで建設されるなどしたため既に原形をとどめていないことが判明した。

当初、遺構プランと考えられた幅広な溝状の落ち込みは精査の結果、流水によるものと判断され、「竪穴住居跡」「土師窯跡」は検出できなかった。また、国道方面に検出された2基の土壙も、壁面の一部が痕跡として残存しているにすぎなかった。

遺物として、古代の甕形土器の破片が整理用コンテナに2箱分出土したにすぎない。しかし、この甕形土器は、所謂「叩き目」を器外面に見出すことができ、「あかやき土器」「土師器」「須恵器」と各研究者により見解のわかれる土器である。本書では、秋田県内のこれまでの見解に追従し「叩き目のある甕形土師器」として記述する。

所謂「叩き目のある甕形土師器」は、秋田県内では、湯沢市広沢山遺跡、仙北町・千畑村払田柵跡、秋田市秋田城跡・後城遺跡、男鹿市三十刈Ⅱ遺跡、能代市中台遺跡の6遺跡から出土している。

〔**払田柵跡**〕　ＳＩ27竪穴住居跡例は、丸底を呈し外面を平行叩き目、内面がゆるいＵ字形の当て板痕とカキ目が施され、胎土には砂粒を多く含む。焼成はやや良く、茶褐色を呈する。ＳＫ60土壙例は嘉祥2年銘のある木簡と共伴出したもので、明褐色で、紐巻き上げ・叩き締め・ロクロ調整後、体部内・外面に刷毛目あるいは篦削りのあるものが多い。底部破片はすべて糸切りのものである。

〔**秋田城跡**〕　では、坏形赤褐色土器、回転篦切りされた坏形須恵器、高台付坏須恵器と共伴した。砲弾形を呈し、外面頸部より胴部には横方向のカキ目が施され、下方には内面に当て板をあてて葉脈状の叩き板で叩き締めている。内面にはカキ目、下方には当て板痕がみられる。赤褐色を呈する。

〔**後城遺跡**〕　ＳＩ169竪穴住居跡例は、砲弾形を呈し頸部が「く」の字状に外反し、口唇部がやや内反する。ロクロ整形されており、体部外面上半は横位方向のカキ目、内面は縦位方向のカキ目を施した後に横位方向のカキ目を施す。体部下半及び底部は、外面が斜位方向に平行叩き板痕、内面に同心円当て板痕が認められ、体部外面中央部には篦削りが行われている。色調は赤褐色を呈し焼成は良好である。

〔**三十刈Ⅱ遺跡**〕　ＳＩ01竪穴住居跡例は、砲弾形の甕で、上半分がロクロ整形、下半分が内・外面とも叩きによる整形で、口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部は直立する。赤褐色を呈する。

〔**中台遺跡**〕　第1号竪穴住居跡例は、丸底ふうの甕の破片で叩き目痕が認められる。

〔**広沢山遺跡**〕出土の土器は、(1)外面「叩き目」・内面「指なで」または「篦なで」。(2)外面「叩き目」＋「刷毛目」・内面「刷毛目」または「篦なで」、「指なで」。(3)外面「叩き目」＋「篦なで」・内面「指なで」＋「篦なで」。(4)外面「叩き目」・内面「刷毛目」。(5)外面「叩き目」・内面「平行当て具痕」あるいは「青海波文」。(6)外面「篦削り」・内面「刷毛目」。

(7)外面「篦削り」・内面「刷毛目」＋「指なで」または「刷毛目」＋「篦なで」。(8)外面「指なで」・内面「指なで」。の各調整法が観察される。

以上6遺跡から出土した所謂「叩き目のある甕形土師器」を総合すると、口縁部が外反し、口唇部が直立気味あるいは直立し、胎土に砂粒・小礫を多く含み、赤褐色を呈するが、黒斑をほとんど認めないという共通点を有する。しかし、甕形と言いながらも平底形を呈するプロポーションと、砲弾形と形容されるような丸底のプロポーションの2種の形態が存在するし、「叩き目」という用語自体にも、成・整形時のいくつかの工程の中の初期段階として器壁を「叩き締め」た痕跡を表現している場合と、最終器面調整としての「叩き目」の2種類が含まれていることが明らかになった。

平底形のプロポーションを呈する甕形土師器には、口縁部から底辺部まで「叩き締め」の痕跡としての「叩き目」が観察されるのに対し、砲弾形を呈する甕形土師器には、体部下半に限定して最終器面調整としての「叩き目」が観察される。また、砲弾形土器の内面には、同心円状・U字状・平行状の「当て具」痕が認められるのに対し、平底形土器の内面には、指なで、篦なで・刷毛目の痕が認められるが、「叩き締め」時の「当て具」痕は残存しない。

「叩き目のある甕形土師器」のうち平底形のプロポーションを呈するものは、岩手県（胆沢城跡・力石Ⅱ遺跡・古館駅前遺跡・志波城跡）、宮城県（上新田遺跡）、福島県（西原遺跡・谷地前C遺跡・上悪戸遺跡）など太平洋側に分布がみられ、砲弾形を呈するものは、山形県（宅田遺跡・境興野遺跡・境田C′遺跡・境田D遺跡・地正面遺跡・俵田遺跡・千河原遺跡・熊野台遺跡）、石川県（加賀三浦遺跡）など日本海側に分布がみられる。（富山県・新潟県でもその存在が確認されているとの事であるが未確認）

秋田県内では、現在のところ砲弾形を呈す甕形土師器は日本海沿岸部に多い。内陸部の払田柵跡では両者が出土しているが、奥羽山脈西縁部にあたる広沢山遺跡では、平底形タイプが多くなる。このことは、極めて短絡的であるが、人的・物的交流の経路を具現するものと解釈できよう。

さて、「叩き目のある甕形土師器」の年代についてであるが、平底形タイプの「叩き締め」た土器は、胆沢城創建期のＳＤ114地割溝出土例や嘉祥2年銘木簡が共伴した払田柵跡ＳＫ60土壙例に直接的に求めることができるし、砲弾形タイプの最終器面調整である「叩き目」をもつ土器には、9世紀前半の年代が与えられている。

引用・参考文献

山下孫継　1961　『湯澤市雄勝郡能埋蔵文化財』　湯沢市教育委員会

秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所　1976　『払田柵跡－昭和50年度発掘調査概報－』

秋田市教育委員会　1976　『秋田城跡－昭和50年度秋田城跡発掘調査概要－』

秋田地所㈲・秋田市教育委員会　1981　『後城遺跡発掘調査報告書』

秋田県教育委員会　1984　『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書－秋田県男鹿市における縄文・弥生・平安時代遺跡の調査－』　秋田県文化財調査報告書第110集

秋田県教育委員会　1978　『中台遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第50集

水沢市教育委員会　1979　『胆沢城跡－昭和53年度発掘調査概報－』

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1979　「力石Ⅱ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告』　岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第８集

岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局　1979　「古館駅前遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　岩手県文化財調査報告書第35集

盛岡市教育委員会　1981　『志波城Ⅰ　太田方八丁遺跡範囲確認調査報告』

高橋信雄　1982　「３古代」　『岩手の土器－県内出土資料の集成－』　岩手県立博物館

宮城県教育委員会　1981　『長者原貝塚・上新田遺跡』　宮城県文化財調査報告書第78集

福島県教育委員会・㈶福島県文化センター　1980　「西原遺跡・佐平林遺跡・谷地前Ｃ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』　福島県文化財調査報告書第85集

福島県教育委員会・㈶福島県文化センター　1983　「上悪戸遺跡・下悪戸遺跡」　『母畑地区遺跡発掘調査報告12』　福島県文化財調査報告書第116集

山形県教育委員会　1980　『熊野台遺跡調査発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第31集

山形県教育委員会　1981　『境興野遺跡』　山形県埋蔵文化財調査報告書第46集

山形県教育委員会　1982　「地正面遺跡・前田遺跡・塚田遺跡・佐渡遺跡発掘調査報告書」『農林事業関係遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第51集

山形県教育委員会　1983　『宅田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第72集』

山形県教育委員会　1984　『俵田遺跡・第２次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第77集

日本道路公団仙台建設局・山形県教育委員会　1984　『境田Ｃ′・Ｄ遺跡発掘調査報告書　山形県埋蔵文化財調査報告書第76集

山形県・山形県教育委員会　1984　『千河原遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第80集

石川考古学研究会　1967　『加賀三浦遺跡の研究』